

浮世絵の世界～葛飾北斎の世界へようこそ～

すみだ北斎美術館学芸員 奥田 敦子

1. すみだと北斎

■生誕地で開催される「ねぶた祭り」



墨田区の両国国技館 から歩いて 10 分くらいのところに「すみだ北斎美術館」があり、美術館のすぐ目の前に位置する公園に接する「北斎通り」のあたりが、左図の葛飾北斎〔溪斎英泉「北斎肖像画」(国立国会図書館デジタルコレクション)〕が生まれたところと言われています。北斎通りは、その昔「本所南割下水」という用水路で、歩道には昔の名残りをとどめようとそこに掛かっていた小さな橋の名前を墨田区が書き記していますので、お越しになるときは足元も見てみてください。美術館のあたりには大きな津軽の藩邸がありました。津軽と北斎は関りがあつたようで、津軽藩主が北斎に屏風に馬の絵を描くように依頼したと伝わっています。ここでは例年 10 月の最終土日あたりにねぶた祭りが開催され、大きなねぶたが夜に北斎通りを曳かれていきますので、見物いただくと楽しいと思います。

北斎は非常に長生きでした。生まれたのは宝暦 10 年 (1760)、亡くなったのは嘉永 2 年 (1849) で、明治になる 20 年ぐらい前まで生きていたこととなります。数え 90 歳という長命です。長生きとともに知られているのが、引っ越しを非常に多くしたことで、明治時代の文献『葛飾北斎伝』の中では 93 回引っ越したと伝えられています。生まれたところからそれほど離れていない範囲で小規模に移動していた感じでした。

■こたつ布団をかぶって描いていた

右図は弟子の露木為一が描き残した「北斎仮宅之図」(国立国会図書館デジタルコレクション)で、北斎の暮らしぶりがよく描かれています。両国駅の南にある「榛稲荷神社」の境内の長屋に住んでいたころのもので、布団をかぶってなにかを描いている老人が北斎で、その前でキセルを持って眺めているのが娘の応為です。この絵を元に当館では等身大の人形で再現していますが、ものすごく散らかっていて、絵を描くのを中心として、そのほかの身の回りのことはあまり構わなかったと伝えられている暮らしぶりが分かります。現在上映中の「おーい、応為」という映画の中でも、この部屋の様子が再現されているようです。応為の作品は本当に残っておらず、肉筆画は世界で 8 点だけ確認されていますが、その中の貴重な 1 点が当館で開催中の「北斎をめぐる美人画の系譜」(2025 年 11 月 24 日で終了) という展覧会に出ていますので、ぜひお越しください。父親の北斎は応為について、美人画は自分より上手いかもしいないと言っていたそうです。



2. 板元とは

■浮世絵の総合プロデューサー

北斎といえども一人で浮世絵を出すのは難しく、その制作において板元は非常に重要な存在でした。板元というのは、簡単に説明する際は現在の出版社みたいなものと説明することもあります。もう少し幅広く複雑です。仕事の内容は企画、絵師の選定、彫師や摺師の指揮、出版、販売流通など多岐

にわたります。具体的には流行に沿って企画し、テーマに合った絵師を選定します。彫師や摺師についても、腕によって出来映えが変わるので選定作業は重要です。職人たちはたいてい板元が抱えていたのではなく、それぞれの仕事を構えて活動しており、そこに依頼するため、人間関係やネットワークも重要になってきます。それもただ任せるのではなく、こういう風に彫ってほしいとか、こういう色で摺ってほしいとか、板元と絵師で指示して作業を進めます。出版されたものは板元が自らの店で売ったり、仲間の板元のところで売ってもらったりするなど、流通や販売も手がけます。言わば浮世絵の総合プロデューサー的な存在です。板元がいなかったら、いま残っている写楽、歌麿、広重、北斎らの版画を見ることができなかったと思います。なお、「板元」を「版元」と書くこともあり、どちらでも間違いではありませんが、江戸時代の文献だと「板元」の表記でと出てくることが多いです。

■「地本問屋」と「書物問屋」があった

江戸の板元は扱う内容によって大きく二つに分けられます。一つは学問的な書物を扱う板元で「書物問屋」と呼びます。もう一つが娯楽的な草双紙と呼ばれる絵入本や浮世絵版画などを扱う板元で「地本問屋」あるいは「絵草紙屋」と呼びます。「べらぼう」で里見浩太朗さんが演じている須原屋市兵衛は、堅い内容を扱う書物問屋で、蔦屋重三郎、鶴屋喜右衛門、西村屋与八らは地本問屋の仕事が主です。これが大手になると、書物問屋と地本問屋の両方を兼ねるところも結構出てきます。蔦重もドラマで書物問屋の株を持ったと喜んでいましたが、地本問屋だけじゃなく書物問屋も兼ねると手堅く儲かるので、商売上大事な動きだったのです。

■暖簾は低く、間口は大きく

右下の三代歌川豊国が描いた「今様見立土農工商 商人」（国立国会図書館デジタルコレクション）は上野広小路に店を構えていた魚屋栄吉という板元の店の様子です。歌川広重の「名所江戸百景」シリーズなども出した板元として知られています。今の本屋と一緒に店頭で売れ筋の商品を平置きします。さらにお客さんの目につくことが大事なので、暖簾はできるだけ短く、間口は大きくしています。非常に分かりやすいですね。



北斎は数え 19 歳の時（安永 7 年・1778 年）に勝川春章に入門して勝川春朗という名前をもらいます。春章は役者絵の第一人者で、春朗を名乗った北斎も役者絵を始めました。最初に描いたと言われている役者絵は板元不詳ですが、安永 8 年から天明 3 年の 5 年間ぐらい

に絞ると、西村屋与八、松村屋弥兵衛、鶴屋喜右衛門、上総屋利兵衛、秩父屋庄右衛門など、うち何人かは「べらぼう」にも出てきている板元たちと仕事をしていたことが分かっています。

2～1. 西村屋与八

■「富嶽三十六景」の出版で知られる

その中でも西村屋与八は特筆すべき板元で、かなり早くから北斎に依頼しているのが確認されています。堂号は永寿堂。江戸時代の中期の宝暦年間（1751-64）から開業しており、江戸の地本問屋の中では老舗のほうです。三代続いており、蔦重とだいたい同時代にあたるのは初代です。お店は馬喰町二丁目というところにありました。西村屋は北斎の「富嶽三十六景」を出したことで知られていますが、それは三代目の時になります。北斎がそのお店の様子を描いたのが右の『絵本庭訓往来』初編（文政 11 年 半紙本 西村屋与八 すみだ北斎美術館）です。現在、馬喰町 2 丁目の最寄り駅は馬喰横山ですが、私が歩いてみたところ蔦屋があった通油町（現在の中央区日本橋大伝馬町）まで歩けない距離ではなく、板元は至近距離に集まっていたことがうかがえます。馬喰町というところは地方



から出てきた人が泊まるための宿屋もたくさんあったので、板元がそういうところにお店構えているとお土産にも買ってくれますから集中していたと思われます。

■デビュー間もない北齋に依頼

西村屋与八は北齋がデビューした翌年の安永9年に『白井権八幡随長兵衛 驪比翼塚』という黄表紙の挿絵を頼みます。黄表紙というのは絵がメインの小説で、その挿絵をデビュー間もない北齋に頼んでいます。初代はそのほか風景画、江戸の言葉で言うところの名所絵を頼んでいます。当時の浮世絵のメインのジャンルは役者絵や美人絵でしたが、西村屋は名所絵という、少々売れ筋から外れるものの、手堅く売れる絵のジャンルを依頼したのでした。右の「新板浮絵両国喬夕涼花火見物之図」(天明頃 大判錦絵 西村屋与八 すみだ北齋美術館)は隅田川で催されていた両国の花火を描いたものです。あまり何もない感じですが、当時の両国橋あたりは「火除地」という火災が広がらないための大きな広場があり、そこに食べ物屋や見世物などの小屋がたくさん立ち並んで賑わっていました。手前側が現在の中央区、奥側が墨田区で、上流の方には浅草寺の五重の塔も描かれています。手前を大きく奥を小さく描き、遠近のメリハリをつけたものを「浮絵」と言います。手前が浮いて見えるように見えるから浮絵と呼ばれました。



■西洋の絵画技法をどん欲に吸収

浮絵は西洋の遠近法を活かしています。江戸時代は鎖国(最近の歴史では海禁策に改められている)をとっていたと言われていますが、完全に国を閉ざしていたわけではなく、諸外国の情報を貪欲に吸収しており、絵画の技法にも生かしていました。江戸の人たちの旺盛な好奇心が伺えます。西村屋は遠近法を効かせた名所絵を、北齋の初期に多く頼んでいました。ですから三代目の時に急に「富嶽三十六景」を描かせたというより、長いつながりがあったということも押さえておく必要があります。早くから風景画の才能を見抜き、売れ筋の役者絵より向いていると思っていたのかもしれませんが。

2～2. 蔦屋重三郎

■デビュー11年目に北齋に関わる

蔦屋重三郎は板元の中でとても有名な存在ですが、北齋とは蔦重がデビューしてから11年目の時にやっと関わった感じです。ドラマの中でも新興の板元として描かれていますが、西村屋与八や鶴屋喜右衛門といった老舗から見ると、新興の板元で、30代ぐらいになって安定してきたころによく北齋に仕事を依頼したと考えられます。蔦重は寛延3年(1750)に新吉原に生まれ、安永年間(1772-81)に吉原大門前の五十間道で本屋を開業しました。そのころは『吉原細見』という吉原のガイドブック中心の仕事をしていましたが、天明3年(1783)に日本橋通油町に出店します。二代蔦重の時のお店の様子を描いた北齋の作品には、暖簾に富士山型の下に蔦の葉っぱを配した蔦屋の商標や「耕書堂」という堂号が入っています。「耕書堂跡」は現在の中央区日本橋大伝馬町にありました。近くには鶴屋喜右衛門がお店を構えていたことが分かっています。ここで蔦屋は黄表紙や狂歌本を次々と出版する傍ら、錦絵も出していました。

右図は蔦屋が北齋に依頼した最初の錦絵「初代中山富三郎 団三郎女ほう十六夜」(寛政2年 細判錦絵 すみだ北齋美術館)で、北齋が30歳、蔦屋が40歳くらいの時の作品です。北齋のデビュー11年目にして初代蔦重と初めて仕事をしたことが確認できる作品が残っています。この役者絵は市村座という歌舞伎小屋で正月に演じられた「うれしく存曾我」という演目の中で、初代中



村富三郎が十六夜という役を演じている姿を描いたものです。ちなみにこれより3、4年後に写楽が同じ中村富三郎を描いた絵があり、後ほど比較してみます。

■北斎への注文なくし写楽に集中

寛政3年(1791)のころは寛政の改革が厳しい時で、蔦重が出した山東京伝の本が発禁処分となるなど、重い処罰が課せられました。一説に蔦重は「身上半減」という、財産を半分持っていかれる処罰を受けたとの説もあるようですが、半分という記録はなかなか見つからないものの、重い処罰を受けていることは確かだとされています。そこで売れ筋の役者絵を描かせて起死回生を図ろうと、東洲斎写楽の錦絵を出版していったのですが、その後無理が祟ったのか、寛政9年(1797)に数え48歳の若さで亡くなりました。脚気という病気だったと伝えられています。蔦重はこの重い処罰を受ける少し前から北斎との関わりがありますが、そのころは役者絵の有望な描き手を探すという状況だったと考えられます。北斎の師匠である勝川春章と蔦重は、ドラマの中でもとても仲良しであったという表現がされていましたが、実際結構一緒に仕事をしていたので、北斎はその春章の有望株の弟子だったため役者絵を頼んだのでしょう。ただ寛政4、5年になると北斎への役者絵の注文はなくなっており、蔦屋が写楽に集中しようとしていたというのが美術史の大方の見方です。

■求めていたものに足りなかった？

では写楽と北斎を比べてみましょう。先ほどの北斎の役者絵と写楽の「中山富三郎の宮城野」を比べると、初代中山富三郎という人は顎がしゃくれた特徴があるのですが、写楽はその風貌を捉えているのに対し、北斎のほうは理想化した勝川派風の描き方をしています。右の北斎の作品「三代目大谷鬼次 かちはら源太かげすへ」(寛政初期 細判錦絵 すみだ北斎美術館)は、鬼次の頬骨がぐっと出た男らしい容貌を表現してはいるのですが、少々おとなしく、理想化した役者を美しく魅力的に描こうとする勝川派の描き方の枠から出なかったように思われます。一方の写楽の「三代目大谷鬼次の江戸兵衛」は、鬼次の欠点とも言えるようなゴツゴツした顔を、思い切り誇張して描いています。写楽のほうが、インパクトが強いのです。個性豊かな北斎にしてはと思われるかもしれませんが、初期のころは個性がまだ出ていかなかったのだと思われまます。もちろん流麗な線でよく描いていて、魅力があると思いますが、蔦重が求めていた何かには少し足りなかったのかもしれない。



■「壬生狂言」「仁和嘉狂言」もシリーズ化

それでも蔦重は、役者絵に限らずさまざまなテーマを北斎に描かせています。最初に「壬生狂言」というシリーズを紹介します。壬生狂言は京都の壬生寺で演じられていた狂言で、これが江戸にも流行したということはあまり知られていませんが、両国などいろいろなところで演じられていました。流行りものをシリーズ化して描かせようとしています。右の「仁和嘉狂言 三月 花すもう」(寛政3年 中判錦絵 すみだ北斎美術館)を含む「仁和嘉狂言」というシリーズは、現在14図が確認されているという大シリーズになります。このシリーズが描く吉原俄は、「べらぼう」にも出てきており、吉原の年中行事の中でも多くの人出が見込めるイベントで、芸者さんや幫間たちが狂言や歌舞伎の所作や踊りの真似をしながらパレードしました。これを題材とした本シリーズは、吉原出身の蔦屋にとって大事な仕事だったのかもしれない。ジャンルの言うと美人画になると思いますが、ここでも北斎の魅力がいかに発揮されています。吉原俄は、歌麿や鳥居清長などいろいろな絵師が描いていますが、北斎のこの吉原俄の美人画は、とても生き生きとした動きが描かれていて、非常に躍動感があります。



■北斎、勝川派を離れ新境地へ

普通浮世絵師は一つの流派に所属すると移らないのですが、北斎は寛政6年、数え35歳の時に勝川派を離脱し、江戸琳派の頭領である俵屋宗理になります。この間の事情は分かっていませんが、兄

弟子とうまくいかなかったなどと言われたりしています。当然錦絵の仕事は減ったのですが、その分自由がきくのか、魅力が爆発的に出ていきます。右の「巳持」(寛政9年 摺物 すみだ北斎美術館)は「摺物」として錦絵とは少し違います。錦絵というのは店頭で並べて不特定多数の人に売りますが、摺物というのは依頼されて作るもので、最初にお金をもらい発注に合わせて制作します。店頭で無理に目立たせる色を使うこともなく、非常に凝った技法も使え、板元にとっても絵師にとっても安定的な仕事と言えます。

■人気を博した「宗理型美人」

金色や銀色に見える高価な絵の具を使ったり、細かいいろいろな技巧を凝らしたりした仕事ができるのです。このころ北斎は宗理型美人の美人画をたくさん出し、肉筆も多く描いていました。江戸時代の本の中に「宗理が描く美人」という下りが、登場人物の美人をたとえる表現で出てきます。宗理(北斎)の美人画が江戸の人に言葉だけで通じるぐらい人気があったということですね。とても細身で柳腰の美人で、豊満で妖艶な歌麿とは真逆のタイプです。北斎の美人画の絵師としての側面は、風景画に比べてあまり注目されていませんが、結構な人気があったことが確認されています。初代蔦重が亡くなった寛政9年に蔦屋から出された狂歌本『柳の糸』に、こうした宗理型美人が風景の中に描き込まれた挿絵もあります。江の島の手前に大波が描かれており、北斎が大きな波を描き始めた芽生えとしても知られています。



2～3. 二代目蔦重

■北斎に深く関わる

北斎との関わりが非常に深いのは二代目蔦重です。本名は勇助。同じ板元業界からやって来た人で、初代蔦重の番頭となった後、初代没後に婿養子となり二代目を継いだということが、曲亭馬琴の随筆に書かれています。北斎は二代目のもとでいろいろなことやらせてもらっています。「時太郎可候」というペンネームで、本文も挿絵も自分で描いた黄表紙が4冊残っていますが、そのうちの3冊を二代目蔦重のところから出しています。『児童文殊稚教訓』という黄表紙では、「へたさくしや可候」という名前入りで自画像も登場しています。「作者としてちょっといたらないけれども、いろいろとよろしく願います」みたいなことを殊勝に語っていて、北斎と二代目との関係もよく伺えます。

右の『潮来絶句集』(富士唐麻呂作 享和2年 中本2冊 すみだ北斎美術館)は、非常に豪華な絵を掲載した狂歌絵本というものです。茨城県の潮来で流行った潮来節という歌があり、これが吉原でも流行しました。潮来は船の運搬が非常に盛んで、船員たちがたくさん潮来に泊まるので遊郭ができる。そこで潮来節という色っぽい歌が流行り、吉原でも潮来節が謡われるようになりました。作者の唐麻呂が出ていた宴席では、これを元に狂歌を詠み、さらにそれを漢詩にしようという文学サロンみたいなことをやっていた、それを二代目蔦重が聞きつけ、本に出版させて欲しいと申し込んできて、出来たのがこの本だと伝わっています。そこに挿絵の担当として北斎が起用されたのです。



■北斎も危ない目に合ったかも？

この富士唐麻呂という人は、本名を藤堂良道と言い、現在の三重県あたりを領有していた藤堂家の血筋に当たる人です。儒学者としても知られていましたが、彼がこのように吉原の遊びで詠んだものを二代目蔦重が本にしたところ、少々大変なことになる。享和2年というのは、松平定信が寛政の改革のち失脚している時期にも関わらず、残った幕閣がまだ奢侈禁令を厳しく続けていました。定信の場合は道理に合わせて処罰していたのですが、もはやめちやくちなことになっていて、享和2年には色摺りの豪華な出版物は出すなということまで言い始めています。そこに運悪くこれが出てしまったので処罰の対象になり、二代目蔦重と番頭は大変なことになる。その顛末が、藤堂良道が後

に書き残した『老婆心話』という随筆の中に記されており、それによると番頭の忠兵衛が奉行所に呼び出され、作者の名前と正体を明かせと詰問されます。しかし言ったら本人はもとより藤堂家の殿様にまで類が及ぶので絶対に名前を明かさず、自分ということにして作者を守りきったと伝えられています。絵師のほうは咎められなかったようです。二代蔦重の元で北斎はそういう危ないところにも関わりかけましたが、いろいろな狂歌本の仕事もさせてもらいました。

■「美人大首絵」も依頼

また、「美人大首絵」という美人の顔を中心に大きく描く半身像を二代目蔦重は北斎に依頼しています。しかし、北斎の錦絵の美人大首絵はほとんど残っておらず、「風流無くてなぐせ」という美人のいろいろな癖を紹介した、現在2図が確認されているシリーズのみ確認されています。本シリーズを見ると、宗理型美人と言われている細面の楚々とした美人が描かれています。このタイプは摺物か肉筆画が多く、一般販売される錦絵のタイプで大きく描いたものは、このシリーズしかないので、とても貴重です。二代目蔦重のもとで、北斎の表現の幅が広がっていったことが伺え、蔦屋は北斎にとってなくてはならない板元であったということが考えられます。

3. 葛飾北斎

■読本挿絵で人気絵師に

読本というのは小説の一種で、黄表紙みたいに絵は多くなくほぼ文章で、1冊の中に5、6図ぐらいの挿絵が入っているという本をさします。長い小説が多いので大体5、6冊セット、長いものだと何十冊というものもあります。この読本という小説の挿絵が、北斎の40代後半からのメインの仕事になっていきました。当時の随筆に「読本の絵師の作者としては北斎が一番だ」と書かれていたぐらい人気がありました。読本というのは少し難しく、特に有名な曲亭馬琴の作品は複雑怪奇な内容が多いのですが、北斎は小説家を少し間やっていたぐらいですから、それを読み解いて面白い絵にしようとできました。時には文章の本筋から外れるようなことも描いたりしましたが、絵が魅力的なので読者が増えたのだと思われます。

■生きていたネットワーク

右図は北斎が挿絵を描き、曲亭馬琴が文章を書いた『新編水滸画伝』初編初帙（文化2年 半紙本 角丸屋甚助 すみだ北斎美術館）の一部ですが、バーンと妖怪が噴出してきていて、ダイナミックで激烈なシーンですね。この時に最も有名な葛飾北斎という画号を名乗っています。北斎は何回も名前も変えていて、最後は「卍」という名前になったりしています。曲亭馬琴は初代蔦重の番頭もしていましたが、その後作者として活躍し、初代蔦重のもとで北斎と初めてタッグを組みました。『新編水滸画伝』の板元は、有名な『北斎漫画』に関わった角丸屋甚助ですが、初代蔦重が亡くなった後、他の板元のもとでこういうふうにはタッグを組んだりしており、数々のヒット作を生み出しているという点では、初代蔦重のネットワークが北斎と馬琴の中でも生きていたのだと思えます。

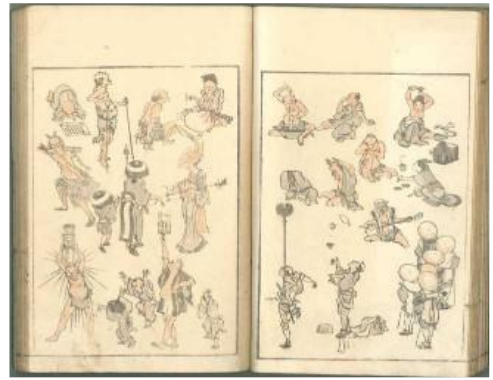


3～1. 北斎漫画

■64年続いた大ロングセラー

北斎は文化年間(1804-18)以降、50歳代で「戴斗」と名乗り、「絵手本」という絵を習う人の手本となる本を集中的に手がけていきます。次ページの図は文化11年(1814)に名古屋の板元の永楽屋東四郎のもとから出した『北斎漫画』初編(半紙本 すみだ北斎美術館)で、文化11年から明治15年(1878)まで64年間続き、全部で15編を数える大ロングセラーになりました。永楽屋東四郎の堂号は東壁堂。安永年間(1772-81)頃が開業したと伝えられます。名古屋を代表する板元で、本居宣長の本も出し、初

代蔦重は名古屋で本を売り広める上での提携先として注目していました。北斎は『北斎漫画』が出る2年前に名古屋に旅行し、名古屋が気に入って滞在して半年ぐらい過ごしました。その時に300図ぐらいのスケッチを描き、そのスケッチを元に永楽屋東四郎が出したのが『北斎漫画』です。全15編をすべて永楽屋が出したのではなく、二編から十編までは「角丸屋甚助」が主力になって出したと言われています。しかしながら、文化年間の末に角丸屋の営業が思わしくなくなり、版木を永楽屋に譲渡して永楽屋の単独刊行になっていきます。しかし名古屋の板元である永楽屋は江戸にも出店して



いるとはいえ、それほど北斎と関わりが深くはなく、角丸屋のほうが長い付き合いでした。最初は永楽屋もこ継続して出版するつもりはなかったところに、非常に商才のある角丸屋が『北斎漫画』は売れるだろうと見越して二編から参画し、北斎にとっても付き合いのある角丸屋であれば仕事もしやすいと考え、それが継続の要因となり、ロングセラーになっていったと考えられます。

■ 1冊で終わるつもりだった永楽屋

ちなみに『北斎漫画』を見る時に、本の柱の部分に北斎漫画初編、二編、三編と入っているものもあるのですが、何も入っていないものもあります。というのも、実は永楽屋は1冊で終わるつもりだったので、柱に何にも入れなかったと考えられています。角丸屋が参画してシリーズ化しようということになってから、再度摺られた時に初編と入れるようになったので、何も入っていないものは初版に近い非常に貴重なものです。地本問屋というのは栄枯盛衰が激しく、ドラマでも鱗形屋が没落してしまうなど起こりますが、それは普通にあったことでした。角丸屋は下駄屋出身で非常にやり手ですが、文政年間(1818-30)にはもう落ち目になっていたというくらいの難しい商売なのです。

■ 人気作品は70代に集中

北斎といえば「富嶽三十六景」ですが、出版されたのは70代の前半でした。北斎は20歳くらいから描いていますが、50年くらい活動したのちに発表されたものなのです。この時期には「富嶽三十六景」だけでなく、フルカラーの錦絵の名所絵(風景画)のシリーズを出しており、ほかにも「諸国瀧廻り」や「諸国名橋奇覧」といった錦絵のシリーズを出しています。みなさんが北斎といえば思い浮かべるものが70代前半に集中しています。板元はいずれも西村屋与八で、この頃は三代目になっていました。西村屋の浮世絵史に残る功績としては、北斎の「富嶽三十六景」を世に出し、浮世絵における風景画の確立に貢献したことだと言えます。風景画、つまり名所絵というのは、浮世絵の二大ジャンルである役者絵や美人画に比べると端のほうにあったのですが、「富嶽三十六景」がヒットして、浮世絵と言えど風景画を思い浮かべるような名作がその後どんどん出ていったわけです。それを成し遂げたのは、西村屋与八と北斎のタッグがあったからこそと言えます。

3～2. 富嶽三十六景

■ 36図に続き10図を追加

「富嶽三十六景」シリーズ(右図)は、各地から見える富士山をめぐる風景を紹介した錦絵の摺物で、36と言いつつ実際残されているのは46図です。西村屋も北斎も当初から、これは長く続いて36図じゃ終わらないかもしれないと思っていたようです。それが分かるのが、西村屋が出した別の本の巻末に載せた広告です。広告の「富嶽三十六景」の部分を意識すると、「富士山の形は見る場所によって違うから、鎌倉の七里ヶ浜や江戸の佃島などいろんな場所から見た富士山の姿をシリーズで出すので、風景画を勉



強する人にも役に立つでしょう。どんどん出すので100まで行くかもしれません」というようなことが言っています。実際には100には至らなかったのですが、36を出した段階でまだいけると、追加の10図を出すことになったので、大ヒットシリーズと言えるでしょう。ちなみに、なぜ最初が36図で10図が追加されたことが分かるのかというと、輪郭線が藍で摺られているというのが最初の36図で、一般的な浮世絵と同じく墨で摺られているのが追加の10図という違いがあるからです。

■藍にこだわりプルシャンブルー

さらにこの広告文によると、「富嶽三十六景」がかなり藍にこだわったシリーズだったことが分かります。36図では輪郭線を一般には摺らない藍で摺っており、またシリーズの初期には「佃島」や「七里ヶ浜」のようにほぼ藍一色で摺っている図があることから分かります。右図はその「相州七里ヶ浜」(天保2年 大判錦絵 すみだ北斎美術館)ですが、ほぼ藍のグラデーションで占められていて、あとは緑など1、2色が少し添えられている程度です。



「富嶽三十六景」に使われている色として特徴的なのがプルシャンブルー(ペロリン藍、ペロ藍)と呼ばれる絵具です。これは日本で生まれたものではありません。プルシャンというのはプロシア国(現代のドイツ)を指し、ベルリンで開発されたと言われている人工の絵具です。生まれたのが18世紀初頭で、その後日本に輸入されたのですが、輸入当初は高かったようです。

■グラデーションが非常に美しい

私も入手して水で溶いてみたのですが、手についたら全然取れなくて、しばらく真っ青になっていました。指紋の間に入るぐらい細かい粒子で、自然の鉱物を砕いた岩絵具などではありえない、人工製品ならではの細かなパウダー状でした。摺師たちはそれを水で溶いて、ニカワを少し置き、さらに水分をたっぷり置いた板木に、絵の具を垂らし、一気にはけでぼかしていきます。その時、板に置いた水分に絵の具が滲んでいかないといけないんですが、細かい粒子のものほどしみやすいので、プルシャンブルーはグラデーションが非常に出しやすいと言われています。なので 風景画を描く時に、空、海、川、湖などに藍が使われることが非常に多いです。特に広々とした景色を描く際、グラデーションが非常に美しく生きて、素晴らしい絵になります。「富嶽三十六景」が成功したのも、プルシャンブルーの効果が大きいと思います。

■退色しやすく扱いにくい青花

それまで使用されていた「青花」の話もしましょう。「露草のことですよ」と言われる人もいますが、露草よりもっと大きくて立派な別のものです。青花はとても鮮度が大事で、摘んだ後長持ちしません。そのため花を摘んで汁をしぼり出し、その汁を紙にしませて青花紙というのを作り、これを流通させてそこから色素を取り出して使っていきます。青花を使った作品は退色しやすく扱いにくく、これが使われた浮世絵を何百年も残すのは非常に難しいです。そうした中、ボストン美術館ではスーパードラゴン兄弟が、明治末から大正時代に錦絵を集めて、ボストン美術館に寄贈し、そこでは長櫃に入れて滅多に展示しないようにという遺言まで残したため、摺られた当時に近い状態で残っています。みなさんは灰色に見えると思いますが、青花による青は、それくらい薄っすらとした上品な色なんです。江戸時代はもう少し鮮やかだったかもしれませんが、ペロ藍のような鮮やかな青ではないことは確かだと思います。それから藍染めの本藍、インディゴブルーももちろん使われていますが、本藍とプルシャンブルーは区別が難しく、科学分析や非破壊検査で分かっているところによると、輪郭線は本藍で、鮮やかなグラデーションのところはプルシャンブルーだとされます。

3～3. 錦絵の代表作発表

■全国の滝や橋をシリーズ化

プルシャンブルーの発色を活かしたシリーズを、西村屋と北斎がタッグ組んで天保(1830-44)の初期、北斎70代前半に出しています。例えば次頁の「諸国瀧廻り 下野黒髪山きりふりの滝」(大判錦

絵 天保4、5年頃 すみだ北斎美術館)をはじめとする「諸国瀧廻り」や「諸国名橋奇覽」というシリーズです。これは日光の霧降の滝ですが、「諸国瀧廻り」は日本全国の有名無名の滝を描いていたものです。「富嶽三十六景」と同じ切り口で、そちらは富士ですがこちらは地形によっていろいろな流れ方をする滝をめぐって、さまざまな水の動きや景色を紹介していこうというコンセプトで描かれています。なお、「諸国名橋奇覽」は全国のいろいろな橋を描いていたものです。「諸国瀧廻り」は8図ですが、「諸国名橋奇覽」は11図から成るシリーズと考えられます。「諸国瀧廻り」の「足利行道山くものかけはし」ですが、私も現地に行ったことがあって、こんなに高くないなと思って見ていましたが、少し誇張していますね。これらのシリーズにもプルシャンブルーが効果的に使われています。西村屋はこういうシリーズが売れるだろうと見越して、北斎に依頼していたと思われます。逆に言えば西村屋が財を投じてこのようなシリーズを出してくれなければ、北斎の錦絵シリーズの名作を私たちは見ることはできなかつたわけですね。



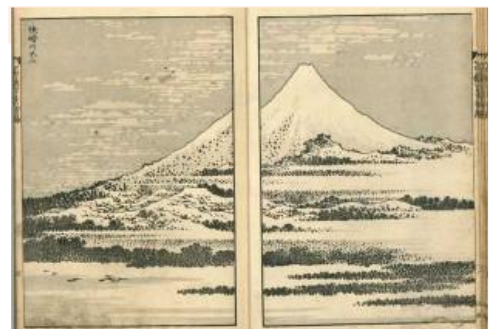
■「半分は江戸のものなり不尽(ふじ)の雪」

江戸の人々にとって富士山は非常に大事な存在でした。東京の各地に「富士見坂」などの地名がありますが、いろいろなところから当時本当に見えたと思います。「半分は江戸のものなり不尽の雪」という俳句が残っています。駿河や甲斐の人が聞いたら怒りそうですが、江戸っ子にとってそれだけ富士山が身近な存在でした。いろいろな狂歌や俳句を調べていると、富士山が見える家に住みたいみたいなことも詠んでいます。富士山に登りたいけれどお金もかかるから、「富士講」というグループでお金を積み立てて代表者が登りに行くというようなサークル活動も流行っていました。こうした世相を背景に、西村屋もこれは売れるということで刊行したと考えられます。そしてヒットに気を良くして、次は滝で行ってみよう、その次は橋で行ってみようなどと、西村屋と北斎がわいわいやりながら作っていたことを、想像をしながら鑑賞するだけでも非常に楽しくなるシリーズです。

3～4. 晩年の飽くなき探求心

■102図が入った『富嶽百景』

それでも北斎は、まだ富士山を描き足らなかつたのか、晩年に飽くなき追究を始めます。天保5年(1834)の作、つまり数え75歳のときですね。画号も「画狂老人卅」に変えて、右図の『富嶽百景』(半紙本 すみだ北斎美術館)という本を出しています。富士山をもっといろいろな切り口で見せようとして、102図も入っている3冊本セットの絵手本を出しました。北斎はこの中の「跋文」という後書きで決意表明みたいなものを書いています。その内容は「私は6歳から絵を描き始めましたが、70までは取るに足らない絵だっただと思っています。まだこれからどんどん精進して百数十歳まで生きて、一点一画が生きているように感じられるような本当の絵を描いていきます」という内容で、なかなか枯れない人ですね。



■残る時間は肉筆画に専念

天保年間になると天保の改革が始まり、再び出版も取り締まりの対象になり息苦しくなります。そのような状況のもと、北斎は板元と一緒にやるのも楽しかったとは思いますが、やっぱり板元の考えや売れ筋などで制約もあるし、さまざまなところから影響を受ける出版から、自分の筆で好きなように描くことができる肉筆画へ、北斎はもう残る時間は肉筆画に専念しようとシフトしていきます。

長野県の小布施に高井鴻山という北斎の門人で大富豪がいて、北斎はその人を頼って小布施に旅行します。数え85、6歳ですから碓氷峠を越えていくのも大変だったと思います。小布施では鴻山の庇護のもとで、肉筆画を描いたりして過ごしたと言われていて、お祭りの屋台の天井画「男浪図」など

も描いています。これはとても大きくて、縦横とも160センチくらいあります。

小布施はなかなかすぐに行けるところではないですが、西新井大師総持寺には北斎の「弘法大師修法図」という作品があり、10月の第1土曜日だったと思いますが公開しています。弘法大師と鬼の対決を描いた作品で、横幅が2.4メートル



くらい大きな作品です。こうした大作を晩年に精力的に描いているというのは驚異的なことだと思います。さらに大きな作品が上の「須佐之男命厄神退治之図」（推定復元図 すみだ北斎美術館）です。日本神話に出てくる須佐之男命が、疫病神に悪いことしないように約束をさせ、手形を押させている場面が描かれています。北斎が描き、現在の墨田区の牛嶋神社に奉納されました。横幅が2.8メートルくらいある超がつく大作です。残念ながら関東大震災で焼失しましたが、美術雑誌に掲載されていた写真などを基に、科学的な推定分析をして復元したものを、当館の「北斎を学ぶ部屋」に飾っています。

■板元との関りで見ると奥深い

最晩年に近い作と言われているのが、小布施北斎館が所蔵している「富士越龍図」です。北斎が亡くなったのは数え90歳の4月18日ですが、この作品はその年の正月に描いたことが記されています。まるで自分の魂をイメージするように、龍が富士山を越えて昇天していく姿が描かれていて、非常にドラマチックです。これが亡くなる数か月前に描かれたと思えば、とても感慨深いですね。小布施の北斎館でときどき展示していますので、ホームページなどでチェックして行くのもいいと思います。北斎作品は単体で見ただけじゃなく、板元との関わりで見ると、それぞれ展開が違っているのだから、奥深い鑑賞ができるのではないのでしょうか。板元がいろいろなアイデアを出し合って、北斎の世界は広がっていったのです。

【質疑応答】

- Q 北斎は絵を描く時、どうして机を使わず寝そべって描いていたのでしょうか？
- A 横山大観や菱田春草など近代画家の写真を見てもそうしているように、絵師たちは結構近年まで下に置いて絵を描いています。今のように机の上ではなく、下に置いて描くのが一般的だったようですね。それと絵で被っているのはこたつ布団ですが、北斎は1年の半分くらいこたつに入っていたと伝えられており、身体を冷やさないようにした彼なりの健康法でもあったようです。
- Q 北斎の美人画を見ると、面長、細目、おちょぼ口、長胴短脚、板胸ですが、現代の若い人にこの絵を見せたら首をかしげると思います。美の基準が違っていたのでしょうか？
- A 江戸時代の美人の基準はかなり変化と多様性がありました。例えば鈴木春信の時代はお人形さんみたいな可憐できゃしゃなタイプ、鳥居清長の頃はすらっとした八頭身美人、歌麿になると色っぽく豊満な美人、一方の北斎は楚々としたきゃしゃなタイプ、幕末の溪斎英泉の頃になると猫背で不良っぽいというふうには、絵師によっても時代によっても美人の流行が変わっています。そして浮世絵の美人もそれに合わせて変わっていきます。流行をちゃんと追うことで、その時生きている人たちの要望を満たそうとしたのでしょう。
- Q 板元には必ず商標があったのでしょうか？
- A どの板元にも必ず商標はあります。それが浮世絵の画の中に入れられることが多く、どこから出されたのか分かる上、お店の宣伝にもなっていたわけです。時間の関係で説明しなかった西村屋の商標は山に三つ巴ですね。
- Q 普通日本画ではブルーを出す際、ラピスラズリとかアズライトを使っていると思いますが、

江戸時代はどうして輸入のプルシャンブルーやインディゴを使っていたのでしょうか？

- A** ラピスラズリなど鉱物質の岩絵具は水に溶けにくく、ニカワとか粘着質の物を混ぜて盛るようにして日本画に用いていくので、浮世絵では岩絵具系のものはほとんど使われていません。浮世絵の制作を見学した時に、摺った直後の湿ったものを触らせてもらったのですが、全然手につきませんでした。それぐらい繊維にぐっと馴染んで入っていくものが好まれたので、浮世絵ではだいたい植物性の染料と同じ絵具を使っています。「富嶽三十六景」のようにビビットで、発色の鮮やかなグラデーションは恐らくプルシャンブルーだと思われますが、薄い部分のグラデーションは本藍の可能性も高いです。
- Q** アメリカの雑誌が紹介していた世界の文化人 100 人に、日本から紫式部と北斎が選ばれていましたが、北斎の世界的な評価はどんなものなのでしょうか？
- A** 1998 年にアメリカのグラフィック誌『ライフ』が、この 1000 年で世界に功績を残した 100 人を選ぶためのアンケートを行った時に、日本人で唯一選ばれたのが葛飾北斎です。アンケート結果を全体的に見ると、欧米において有名で功績を残しているという観点の選出が多いと思いますが、そうした中で北斎が選ばれたのは、欧米への影響の強さなのだと思います。例えば、踊り子の絵で有名なドガも北斎の影響を非常に受けていますし、ゴッホも弟への手紙の中で「北斎の波の非常にインパクトのある形が忘れられない」というような内容のことを書いています。欧米の写実主義が行き詰まった時に浮世絵の果たした役割は非常に大きく、鮮明な色彩やインパクトのある構図などを取り入れ、殻を破った新たな段階に入っていたとも考えられます。日本でも北斎の評価は高かったとは言え、それほど価値を見出していない時に、海外にどんどん流出するという不幸がありましたが、高い評価をしてくれた欧米からまた逆輸入されてきたことも忘れてはならないと思います。当館にも欧米の方がたくさん来ており、特にフランス人が好んで来られます。やはりジャポニスムの影響が大きいようです。
- Q** 浮世絵の意味を教えてください。
- A** 浮世は、中世以前は「憂世」と書きました。戦争が続いた戦乱の世、疫病などで不安定な中世までの時代、この世は憂うべきものであり、浄土に早く行きたいと考えられていた時代が長く続きました。しかし江戸時代に入って生活が安定してくると、明日以降のことも余裕をもって考えられ、先々のことも楽しもうという雰囲気となって、芝居や浮世絵が盛んになってきました。やっぱりこの世はうきうきと楽しい世だというふうに、この世に対する感覚が変わり、「憂世」にあてる漢字も「浮世」に変わったのです。そして、その時に流行しているファッション、女性、歌舞伎役者、相撲取り、名所など、「今を描いた絵」という意味で「浮世絵」と呼んだわけです。

奥田 敦子（おくだ あつこ）先生のプロフィール

東京学芸大学大学院修了。日本美術史専攻。

太田記念美術館主任学芸員を経て現職。

すみだ北斎美術館の立ち上げから関わり、開館記念展ほか多数の展覧会を開催。

著書

『広重の団扇絵 知られざる浮世絵』（芸艸堂 2010 年）

『THE 北斎 富嶽三十六景 ARTBOX』（講談社 2020 年）

『北斎 百鬼見参』（講談社 2022 年）

ほか論文・解説多数。

YOUTUBE

<https://www.tv-tokyo.co.jp/tokyokousaten/>

「東京交差点 ONE MOMENT #321【葛飾北斎の魅力をもっと伝えたい!】-奥田敦子（すみだ北斎美術館・学芸員）」